逃げ去る恋（1978）

L’AMOUR EN FUITE
LOVE ON THE RUN［米］

メディア　映画
ジャンル　ドラマ
製作国　フランス
時間　96分
初公開日　1996/08/10
公開情報　ヘラルド
映倫　G
リバイバル　1996/07［ヘラルド］

【解説】
　トリュフォー監督、レオ主演のアントワーヌ・ドワネルものの最終篇第５話。印刷工として働きながら、自分の恋愛体験を小説にまとめ出版したアントワーヌは、長らく別居を続けていた妻クリスティーヌといよいよ（フランス初という）協議離婚をした。妻が引き取る息子アルフォンスを音楽学院の合宿にやるため、駅まで見送りに来た彼は、反対ホームの列車に「二十歳の恋」で描かれた昔の恋人コレット（ピジェ）を見かけ、思わず飛び乗って、彼女と昔話に花を咲かせ、現在の互いの身の上を語り合う。彼にはレコード店に勤める恋人サビーヌがいたが、妻子のことがネックとなってうまく行っていない。弁護士のコレットは書店主のグザビエに片想い中。法廷でみかけたアントワーヌの小説をちょうどそこで買って目を通していた所だった。小説の創作部分の話がこじれ、彼女に昔と変わらぬ“煮え切らなさ”を指弾されたアントワーヌはいたたまれず、列車を急停車させ闇の中に消えていった。彼は“運命の恋人”サビーヌだけは逃してはならないと、彼女にずっと明かさずにいた“秘密”を携えて、その部屋を訪れる……。トリュフォー好みの、見知らぬ男が電話ボックスで裂り捨てた写真から始まったロマンスーーというトリッキーなサビーヌとの関係の設定が興味深い。過去四作の総ざらえ的内容で、事実、その回想の出典はいずれもそれらの場面から成る。いささか錯綜がすぎて、後半に至って失速するきらいがあるが、列車を停める辺りの感情の極まりの表現や、突然訪ねてきた母の昔の愛人ルシアンと、初めて母の墓参り（『椿姫』のマルグリットの隣の墓ーーという設定）に向かう場面など実に感動的。中年にさしかかり、人生の苦渋を大いに噛みしめるアントワーヌのその後も気掛かりではあるが、トリュフォー亡き今となっては想像で補う他ないのが残念だ。

【クレジット】

監督	フランソワ・トリュフォー	Francois Truffaut
製作	フランソワ・トリュフォー	Francois Truffaut
脚本	フランソワ・トリュフォー	Francois Truffaut
	マリー＝フランス・ピジェ	Marie-France Pisier
	ジャン・オーレル	Jean Aurel
	シュザンヌ・シフマン	Suzanne Schiffman
撮影	ネストール・アルメンドロス	Nestor Almendros
音楽	ジョルジュ・ドルリュー	Georges Delerue
出演	ジャン＝ピエール・レオ	Jean-Pierre Leaud
	マリー＝フランス・ピジェ	Marie-France Pisier
	クロード・ジャド	Claude Jade
	ダニエル・メズギッシュ	Daniel Mesguich

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。　Copyright (C) 2026 Stingray. All Rights Reserved.